

生消協 2023年度 関西・以西ブロック若手生産者交流会報告

- (1) 2023年9月14日・15日（木・金）、福岡県八女市のガーデンホール矢部川城にて福岡八女農業協同組合の受入れにより、関西・以西ブロック若手生産者交流会が初開催されました。当日は会員15産地47名、パルシステムグループ5名の合計52名の参加となりました。
- (2) 1日目は、西野文敏関西・以西副ブロック長の進行により進められ、澤村輝彦関西・以西ブロック長、渡部さと子副代表幹事、福岡八女農業協同組合の野中公彦代表理事組合長のご挨拶により開会となりました。
- (3) はじめに、福岡八女農業協同組合販売企画課の原龍徳課長より、受入れ産地報告として福岡八女農業協同組合の概要と取り組みについてご報告をいただき、「平成8年に旧8JAの合併により誕生し八女市、筑後市、広川町の2市1町をエリアとした総合農協であること」「代表作物のイチゴ生産は県内の3分の1のシェア、次に八女茶の生産が盛んであること」「2023年は八女茶発祥から600年の記念の年になること」等のお話をいただきました。
- (4) 次に、無茶々園代表で生消協の天津清次アドバイザーより「パルシステム生産者・消費者協議会とパルシステムの歩み、次世代に向けて」をテーマに講演をいただきました。天津アドバイザーからは「パルシステムは第3の生協として、変革と創造のDNAにより、安心安全などの農業運動と生協運動により半世紀をつくりあげてきた。」「産直産地は創業世代が引退を迎え、継続路線から脱却し、変革ができていない産地は衰退する。」「みどりの食料システム戦略や地域循環共生圏など、生産は大事だが、持続可能で新しい関係性を築く事が次の時代には必要。」「新しい種まきを行う事が大切、そして一番の強みは消費者とのつながり、自らの一言が170万人のパルシステム組合員に繋がっている。」「同世代のパルシステム職員と共感でき、共感を活かす経営ができるか。」などのお話をいただきました。
- (5) 質疑の時間では、農薬使用の考え方について「無茶々園は無農薬栽培の技術を持ったメンバーからスタートしたが、気候による病害虫の増加や新規就農者の受け入れや仲間づくりもあり、栽培形態の変遷の歴史がある」とお答えいただきました。
- (6) 次に、渡部さと子副代表幹事より「パルシステムの産直、組合員として伝えたいこと」としてパルシステム神奈川での産地交流事例紹介、新旧消費者幹事の皆さまのメッセージ動画が紹介され、「スーパーやネット販売でも情報という面では産直は身近になり特別ではない存在になってきた。パルシステムの産直は単に商品をつくり・買い・消費するだけでなく、理念に共感し、ともに支えながら、知恵を出し合って様々な課題を共に乗り越えていく関係の産直。」「生消協は生産者と消費者はもちろん、生産者同士が技術や課題を学び共有しあう活動の他に、交流会や研修など様々な機会があるので積極的な活動への参画をいただきたい。」「産地の理念と生産者の想いを知ること、気候変動の中で交流がすべてを解決できわけではないが、消費者として商品の背景を知り理解を深めたうえで消費をしていくことが必要であると考えます。」とお話しいただきました。
- (7) 次に、宇都宮幸博関西以西副ブロック長より、「生消協では次世代リーダー研修があり、全国の後継者と交流する場があり。産地ごとの課題を共有し、自身の生産に活かすきっかけになる。全国の仲間をつながることで、次の農業生産の課題を超えていけたらと考えている。」とお話しいただき、佐藤大輔副部長より「7年前生消協の若手リーダー研修を受け、自身の地域の持続性に危機感を抱いた。その後、1年かけて町の中学生から年配の方までの声を2050年のビジョンマップを作るに至った。夢を語り仲間と共に行動することで変わることができる。」「関西以西ブロックの若い世代が盛り上がり、行動していきましょう」と呼びかけられました。
- (8) 続いて、澤村ブロック長より「今日の出会いは成長につながる。10年後の夢を語りあっていたきたい。」と呼びかけられ7グループによるグループディスカッションが行われました。グループ報告では「耕作放棄地に対しての他地域の活動を知ることができた。10年後農家として地域に何ができ自分が何をしたいか考えポジティブに考え行動していきたい。」「10年後、地域の人たちと関わりながら1人ではできないことを楽しんでいきたい。経営の基盤を作り、地域や

環境に貢献できる体制を築きたい」「子供たちの世代につなげ、人が集まり活気がある地域の中で、家族と楽しくできる農業を続けていきたい。」「国全体で都会の人たちに田舎の暮らしを体験し、移住にもつながる制度づくりを進めたい。」「地域の持続性として雇用の場づくりが必要。農業の魅力をアピールするとともに若い世代・子育てができる環境も整えたい。」などの報告がされました。

- (9) 交流会のまとめとして、澤村関西以西ブロック長からは、「消費も生産も時代は変わっているが、変わらないのは第1次産業が欠かせないことです。今日が出発の日とさせていただき、本日議論されたことを地元を持ち帰り提案をしていただきたい。消費者にも地域にも提案が出来る農家は強い。」と呼びかけられました。
- (10) 2日目は、福岡八女農業協同組合の就農支援センターを訪問し、イチゴ、ナス生産における次世代の地域農業の担い手育成について視察を行いました。同農協、農業振興課の荒巻課長は「過去7期で35名の研修生が就農し、現在も34名が生産を継続している。」「事前の面接や就農に向けたプロセスを確認し、研修中の離脱者は過去1名もいない状況。」「現在は就農後の収益もありイチゴの研修生が大半を占める」などのお話をいただきました。その後、果樹・野菜の2グループに分かれ、果樹はぶどう園地・かんきつ団地、野菜はナス・中玉トマトの施設圃場を視察し2日間の行程が終了しました。



交流会でのグループディスカッションの様子



懇親会では産地毎の報告がされました



参加者へ10年後の再開が呼びかけられました



2日目の就農支援センター視察の様子

以上